

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。
(ただし設問の都合上、一部省略してあります。)

三月のある日、離れて暮らす祖母から宅配便が届いた。
デパートの包装紙に包まれ、卒業祝の熨斗^{のし}がかけられた
細長い箱の中身は、深いブルーの万年筆だった。

送られたわたし本人も、一緒に箱を開いた母も、複雑な
表情を浮かべてしまったのは、嬉しくなかったからという
よりも、この家に卒業する人物が誰一人いないからだっ
た。わたしは来月大学四年生に進級予定で、兄はとくに
一人暮らしを始めて社会人生活を送っている。もちろん、
会社員である父も、専業主婦である母も、とうの昔に学校
を卒業している。

おまけに祖母は、現在、認知症^{にんちしやう}を患^{わづら}っているのだ。症
状は日によってバラツキがあつて、すっかりしているとき
もあるというのは、祖母と一緒に暮らす伯母^{おば}が以前話して
いたことだ。祖母は伯母夫婦とその息子と同居している。
何はともあれ真相を知るために、母は伯母に電話をかけ
た。方言と笑いの交じった電話を、隣で聞くことになっ
たため、話の流れはなんとなく察したものの、電話を切っ

た母にわたしは、なんだったの、と訊ねてみた。

「やっぱりおばあちゃんの勘違い^{かんちがひ}みたいよ。あらー、ほん
とに送ってたのね、って姉さんもびっくりしてたわ。朔美^{さくみ}
が高校卒業だから、お祝い送らなきゃね、なんて前から
ちよくちよく話してたんですって。高校どころか、もうす
ぐ大学卒業だっていうのにねえ」

母は楽しそうに、けれど困った顔をしながら話した。高
校卒業だと思われていたのか。離れて暮らす祖母がわたし
のことを憶^{おも}えて気にしてくれていたのには^Aありがたさや嬉
しさもあるけれど、やはり戸惑^{とまど}いも避けられない。

「で、これはどうするの」

わたしは万年筆の入った箱を指さしながら言った。母が
答える。

「それも訊^きいたけど、送り返してもらうのもなんだし、よ
かったらそっちで使^{つか}って。おばあちゃん、今日はもう
寝てるみたいだから、また改めてお礼の電話かけるって伝
えたわ。朔美は明日は出かけるんでしょー」

わたしは、うん、と頷^{うなづ}いた。明日は和仁^{わに}と会う予定が
ある。特に何をするかは決めていなくて、午前中にお茶を
しながらどこに行くか決めるつもりだ。多分映画でも観^みに

行くことになるのだと思う。

「まあ、このくらいなら、笑って済ませられるけどねえ」
箱を見つめながら、母が言う。このくらい、は、祖母の
認知症にかかる言葉なのだろう。ん、と曖昧に返事をして
から、もらっていくね、と言った。深いブルーの万年筆。
触れてみると、ひやりと硬い感触があった。

自分の部屋に行き、デパートの包装紙が剥がされた、万
年筆の入った白い箱を机の上に置いた。携帯電話を充電器
からはずすと、ベッドに腰かけて、着信履歴からたどつ
て、和仁に電話をかける。彼はすぐに出た。

「もしもし」

「もしもし、今大丈夫？」

うん、と彼が言い、わたしはさっきまで起きていた出来
事を話した。突然の宅配便、 、万年筆、認知症
の祖母。ひととおり話し終えて、向こうの相づちを待って
いると予想に反して、んー、と考えこむような声が聞こえ
てきた。

わたしは不安になりながら言う。

「ごめん、なんだか心配させちゃった？ 認知症とはいっ
ても、普通に生活はできてるみたいだし、さっき言ったよ

うに、伯母さんも一緒に暮らしてるんだけど」

「いや、そうじゃなくて」

否定する彼の、言わんとするところがわからず、わたし
は黙って言葉の続きを待つ。

「本当に卒業祝にしちやえばいいんじゃないかな」

「え？」

「せっかくだから、明日会うときに、何か卒業しようよ。
おれも考えておくから」

「何から？」

「だからそれを考えようよ。小さいものでいいから、明日
中にできること。で、おばあちゃんに報告しようよ」

話しながら、和仁のテンションが高くなっていく感じが
する。わたしは突然の提案に、少々驚いていた。明日中
に卒業……。

何から卒業するのか考えるのを、明日会うまでの宿題に
する、ということで話は落ち着き、通話を終えた。わたし
は、卒業、とつぶやいてみた。よく知っているし、さっき
まで何度も口にしていたにもかかわらず、あらためてつぶ
やいてみると、初めて味わう単語のように感じられた。

卒業。

待ち合わせたカフェは、三回ほど行ったことのあるお店

だ。ケーキ類が豊富で、いつ行っても女性が多い。ドリン
クにオリジナルメニューが多く、味もおいしいのでわたし
は気に入っているが、和仁は少し居心地が悪いらしい。

けれど今日の彼は、居心地について口に出すこともな
く、会うなり、決めた？ と楽しげに訊ねてきた。

「一応考えたよ」

わたしは言った。昨日眠る直前まで考えていたプラン
は、三つあった。アップルピネガーソーダを店員さんに注
文し、お水を飲んでから、わたしはゆっくりと話し出す。

一つ、陶芸とかヨガとか「一日〇〇教室」という名が付く
場所に行き、体験する。

二つ、カラオケで「卒業」がタイトルや歌詞に入っている
もの、あるいは卒業を連想させる曲ばかりを歌う。

三つ、卒業した高校にこっそり忍び込んでみる。

わたしが話した三つのプランを聞き終えた彼は、運ばれ
てきたたんぽぽコーヒを飲み、どれもイマイチだなー、
と明らかに不満げな声を出した。

「まずカラオケと高校に行くのは、別に卒業じゃないじゃ
ん」

「雰囲気味わえるじゃない、卒業の」

「雰囲気だけじゃなあ」

「っていうか、そっちは考えてきたの？ プラン」

自分のプランを否定されたことを少々不満に思いつつ、
わたしは訊いた。和仁が微笑む。擬態語を付けるなら、間
違いなく、にやり、だろう。どうやら自信のある企画があ
るらしい、と表情だけでわかった。

「運動音痴からの卒業」

「は？」

咄嗟に反応する言葉が出たのは、周囲が騒がしくて聞き
とれなかったわけではなく、意味するものがわからなかつ
たからだ。

「朔美って、運動音痴じゃん」

きっぱり言い切られて、わたしはしぶしぶ頷く。突きつ
けられて喜べる事実ではない。

「だからここでひとつ、運動音痴からの卒業を目指すべき
ではないかと思うんだな、おれは」

あえてなのだろうけど、やけにまわりくどい言い方だ。
いつもとは違う。相変わらずにやりとした笑みも顔に張り

っている。

「だから、とりあえずは逆上がりだな、と」

「逆上がり？」

思わず声が大きくなってしまった。逆上がり。その前がいつなのか思い出せないほど、久しぶりに音にする単語だった。

「逆上がり、できないって言ってたじゃん」

和仁と付き合って二年が経つ。わたしが逆上がりができないということが話題に上がったこともあるかもしれない。それにしても、話したのが一度じゃなかったかもしれないにせよ、話したことを忘れがちな彼が、そんな内容をしっかりと記憶しているのは意外だった。よっぽど彼の中ではインパクトのある事実だったのだろうか。

「できないけど」

口ごもるわたしに彼が言った。

「今からやろう。逆上がり」

わざわざ電車に乗ってまで、この公園にやって来たのは、和仁が、ここなら鉄棒が数種類あつてちょうどいい高さのものもあるはずだ、と言い張ったからだ。普段はむし

ろ腰の重い彼が張り切っていることに、なんだか納得がいかなかった。

「ほんと、その格好でよかったよ」

和仁がわたしを上から下まで見て言った。カフェでも、わたしがスカートでないことを確認していた。ショートパンツにカラータイツにスニーカー。むしろスカート穿いてくればよかった、というわたしの真剣なつぶやきは、冗談だと思われたようだった。

「もう無理」

わたしは言った。さっきから何度となく逆上がりに挑戦しては、失敗している。言われるたびに、よくないところを直そうとしてみるのに、結果は変わらない。

失敗回数を重ねるたびに、こんなところで何をしているんだろう、と思えてくる。バカみたいに感じられる。逆上がりができたってできなくなつて、生活に支障はない。

和仁は、動きを止めたわたしをただ見つめ、それからゆっくりと口を開いた。

「無理じゃないって」

「無理だよ」

「卒業して、おばあちゃんに電話しようよ」

咄嗟に言い返そうとしていたのに、卒業という単語に口が止まる。そうだった。卒業のためにここにいるんだ。

今帰っても、誰もわたしを責めない。そもそもおばあちゃんの卒業祝は間違いないだし、あくまで二人で勝手に言い出した、ここでしか通用しない話だ。わたしが、卒業できたよ、と報告したところで、おばあちゃんは曖昧な返事を繰り返すばかりだろうし、真偽だつて問わないだろう。ただ、だからこそ、やる必要があるのかもしれないと思つた。わたしを今まっすぐに見つめる和仁と、二人で決めた、二人だけの話だからこそ、実現させたい。

改めて鉄棒を逆手に握り、挑戦した。だめだ。足は引力に従い、地面に落ちてしまう。

「あと少しなんだよな」

和仁が言い、わたしは小さく頷いて、もう一度挑戦する。

思いきり地面を蹴った。

世界が逆さになり、空が見える。

最初、何が起きたのかわからなかった。

一瞬前に比べて、目線が高くなっている。驚いたよう

な和仁の顔も下にある。

できたんだ。逆上がり。

一回転じゃないんだな、と思つた。逆上がりは同じ場所に帰ってくるんじゃないかと、最初よりも高い場所にたどり着く。逆さになった世界がまた戻り、ここからしか見えない視線を手に入れる。

初めて気づく事実だった。

「すげーじゃん、できたじゃん」

和仁の顔は、驚きから笑いに変わっている。彼の顔を見ていると、こちらまで笑ってしまうのを止められなかった。

「できたー」

わたしは着地し、声に出した。なんだか子どもみたいな声だ、と自分でも思つた。

私たちは笑い合いながら抱き合つた。ベンチにいる母子連れがこっちを見ているのに気づいたけれど構わなかった。鉄錆の匂いが残っている手のひらで、和仁の背中を叩いた。彼もまたわたしの背中を叩いていた。恋人らしさはまるでない、同志としての抱擁だった。

「卒業おめでとう」

笑いながら和仁は言った。ありがとう、とわたしも笑いながら言った。笑いながら。抱き合いながら。

人生初の逆上がりがここでできてよかった、と思った。よく晴れた日に、自分以上に喜んでくれる人の前で逆上がりができた喜びが、全身に満ちていく。和仁越しに見る風景は、心なしか、さっきまで見ていた風景とは、別物みたいに感じられた。

「ありがとう」

わたしは同じ言葉を繰り返して、ゆっくりと体を離していく。もう一度、逆上がりしてみたかった。

(加藤千恵「卒業するわたしたち」による)

問一——線部A「ありがたさや嬉しさもあるけれど、やはり戸惑いも避けられない」とあるが、「ありがたさや嬉しさ」と「戸惑い」について、それぞれ説明しなさい。

問二——に入れるのに適切な語句を、文中から漢字三字で抜き出しなさい。

【注】

*熨斗——贈り物に添えられるもの。

*認知症——脳の細胞が原因で障害が起こり生活しづらくなること。

*陶芸——陶磁器を作ること。

*ヨガ——美容法、健康法の一つ。

*擬態語——見たり、触ったりした感覚を言葉で表現したもの。

*真偽——それが本当かどうかということ。

問三——線部B「わたしは突然の提案に、少々驚いていた」とあるが、それはなぜか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 和仁は祖母の認知症を意外にも深刻に受け止めていると分かり、不安になったから。

イ 和仁の、間違いの卒業祝いを本当にするという提案が、まだよく理解できなかったから。

ウ 和仁なら祖母の認知症についてもっと心配してくれると思ったが、軽く聞き流されたから。

エ 和仁が一人で盛り上がっていく様子が、祖母を馬鹿にしているようで失礼だと思ったから。

問四——線部C「初めて味わう単語のように感じられた」とあるが、その理由として適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「卒業」という言葉の意味について、これまできちんと考えたことがなかったことに気づかされたから。

イ 「卒業」という言葉をもとにして、明日までに和仁を納得させられる提案ができる自信がなかったから。

ウ 「卒業」という言葉を久しぶりに何度も使って、忘れていたその悲しい雰囲気がよくえってきたから。

エ 「卒業」という言葉には、本当は祖母からの強い願いがこめられていることを、しみじみと感じたから。

問五——線部D「運動音痴からの卒業」とあるが、和仁の提案と、朔美の三つのプランではどのような点が違うのか。説明しなさい。

問六——線部E「卒業のためにここにいるんだ」とあるが、ここでは、はじめ乗り気ではない朔美に気持ちの変化が生じている。朔美の「卒業」という言葉の受けとめ方はどのように変化したのか。百字以内で説明しなさい。

問七——線部F「もう一度、逆上がりしてみたかった」とあるが、それはなぜか。次の中から理由としてふさわしくないものを選び、記号で答えなさい。

ア 偶然ではなく本当に自分の力で逆上がりできたのか、確認してみたかったから。

イ 鉄棒の上から見た景色がさつきまでとは全く別物に見えて、違和感をおぼえたから。

ウ 和仁との二人の信頼関係が以前よりも高い場所にいった気がして、うれしかったから。

エ はげましてくれる人の前で、逆上がりのできた喜びをもう一度味わってみたかったから。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

だれかに聴いてもらおうとひとが重い口を開くのは、何を言っても受け容れてもらえない、留保をつけずに、反論もせずに、とにかく言葉を受けとってくれる、自分がそのまま受け容れてもらえる、そういう感触を確認できたときである。このとき、相手に見守られている、自分が相手の関心の宛て先になっていることが大きな力になる。関心をもつひと、じっと待ってくれるひとの前ではじめて、ひとは口を開くのである。西洋のひとたちが関心のことをインタレストと呼ぶことには含蓄がある。インタレストという語は、ラテン語の *interesse*、つまり相互的な存在であるということ(*inter-being*)からきているのだ。

齒科医院でよく、絵本を読んでとせがんでいる幼児を見かける。お母さんが読みはじめても、子どもの気は余所へ行っている。読み終えたらすぐにまた「もう一回」とおねだりする。【1】他の子どもがどんなオモチャをもっているか、どんな遊びをしているかが気になって、話はろくに聴いていない。なにも何度も「読んで、読んで」とくり返す。ここでは、話の中身より、母親の声が自分のほうへ向

いていることの確認が大事なだろう。物語の筋よりも、自分が母親に語りかけられているという状況、

【2】自分の存在がだれかの意識の宛て先になっていることが、子どもにとって何より重要なだろう。

「時間がないので子どもの話をじっくり聴いてあげられない」というひとがいる。でも聴くことは片手間でもできる。ここは仕事をする時間、ここは料理をする時間、ここは家族で団樂の時間と区切らなくても、料理を作りながら、何かをしながら耳だけちよつとそちらに傾けて聴くということもできる。というかむしろ、ちゃんと聴いていないのかなというくらいの方が、話すほうも話しやすい。

真剣に聴かないほうがきちんと聴ける。日々の会話では、気が抜けた雑談のなかから何かが生まれるなどということもよくある。だからといっていい加減に聴いていけばいいというわけでもなく、このひとはいま自分のためにここにいてくれるという感触があればいい。あなたのために早く帰ってきた、ほんの少しだけでもここにいて、この時間はあなたのためにとってあると時間をプレゼントする。そういうことは、子どもは感じ取れる。そしてそういう関係さえあれば、子どもの口から言葉はおのずから漏れてくる。

聴くことのプロは、あえて聴かないことも聴くことのひとつとよく心得ている。臨床心理学者の河合隼雄^{かわけ ぶんしゅう}さんは、かつて相手の口を開かせるコツとして、こんなことを推奨^{すいしょう}していた。「ほう」と切り返すこと、河合さんの言葉で言えば、「感心する才能」である。□ という信号をくり返し送るということである。

接客業のプロは、受け止めること、認めることだけが聴くことでないことを熟知している。たとえば憎まれ口^{にくまれくち}を叩く、わざとつれなくする、思いとは逆のことを言う、聞かえていないふりをするなどして、相手を突き放す。あるいは、聞き流す、聴かなかったことにする、逸らす、とりあわないなどして、相手をはぐらかす。もちろんこんこんと論^{ろん}したり、説教^{せききょう}したりすることもある。そんな緩急^{かんきゅう}や押し引きをよく心得ている。いずれにせよ、聴く時に大事なものは、最後までつきあうことだ。《時間をあげる》ということだ。語る／聴くという関係のなかでは、「ふれあい」よりも、ずれや齟齬^{そご}、すれ違いのほうが顕在化^{けんざいか}してしまう。が、このぎすぎすした関係を何度も経験することこそが大切なのだ。こういう試行錯誤^{しぎさくご}のくり返しの果てにしか、ほんとうの意味で、語る／聴くという関係は生まれてこ

い。語りは信頼^{しんらい}を前提とするが、信頼は言葉の積み重ねのなかでしか生まれてこないからである。そういう言葉のやりとりにかける時間を、ひとびとはなぜか惜^おしむようになっている。

聴くことにも専門家が生まれたというのは、ちょっと危うい状況である。ついこのあいだまでは、聴くプロがいないう代わりに町のなかに聞き役がいた。ひとびとはたがいに自然に聞き役になりあっていた。いまは、たがいに他人の家のことには踏み込まないようになって、聞き役もいなくなった。だから聴くプロも登場してくるのだが、聴くプロがいるとひととはますます他人の話など聴かなくなる。子ども^{こども}の鬱^{ふさ}ぎをみずから聴く前に、すぐに「カウンセリング受けてみる？」と訊^きく。□ という悪循環^{あくじゅんかん}がどんどん進行しているように見える。

(鷺田清一「わかりやすいはわかりにくい？」による)

【注】

*齟齬——うまくかみあわないこと。

*顕在化——はつきりと形にあらわれること。

*鬱^{ふさ}ぎ——気分が晴れないこと。

問一 1 2 1に入る最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア けれども イ だから ウ たとえば エ つまりは

問二 線部A「なのに何度も」読んで、読んで「とくり返す」とあるが、なぜ話を聴いていないのに読んでとくり返すのか、その理由となる部分を本文中から二十五字以内で抜き出し、最初の五字を書きなさい。

問三 線部B「真剣に聴かないほうがきちんと聴ける」とあるが、「真剣ではないこと」によってきちんと聴けている状態とはどのような状態なのか、説明しなさい。

問四 □ に入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア わたしはあなたに関心がある
イ あなたはわたしより優れている
ウ あなたとわたしは同じ考えである
エ わたしはあなたをよく知っている

問五 線部C「このぎすぎすした関係を何度も経験することこそが大切なのだ」とあるが、それはなぜか、説明しなさい。

問六 線部D「そういう悪循環がどんどん進行しているように見える」とあるが、悪循環とはどのような状態のことか、説明しなさい。

三

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 将来は医学のハクシ号を取りたい。
- ② 祖父からもらった時計が今も時をキザンでいる。
- ③ 中学生ならもつとフンベツを持つべきだ。
- ④ 文集のカントウを飾る文章。
- ⑤ 異常気象でサイナン続きた。

